

3 斑点米カメムシ類（主にイネカメムシ）

令和6（2024）年度も斑点米カメムシ類（主にイネカメムシ）による被害が予想されたことから、注意報を3回、技術情報を3回発表し、農業者はじめ関係機関に対して注意喚起を行った。

1 注意報（7月3日発表分）

- （1）作物名：水稻
- （2）病虫害名：イネカメムシ
- （3）注意報発表の根拠

ア 6月27日に県内水田（主に極早生品種）9地点19ほ場で実施したイネカメムシの臨時調査（本田内20回すくい取り調査）で、複数地点において、出穂前の水田でイネカメムシの発生を確認した。

イ 前年調査による本種の発生量（調査ほ場あたりの平均年間捕獲数）は9.20頭（平年2.22頭、令和4年5.05頭）で、過去10年と比較して最も多く、冬期の気温も高めに推移したことから、越冬数は多いと推測される。

ウ 名古屋地方気象台6月27日発表の1か月予報によると、気温は高い見込みで、今後も本虫の活動に好適な条件が続くと予測される。

（4）防除上注意すべき事項

ア イネカメムシは、出穂直後から籾を吸汁し不稔籾を生じさせることから、発生すると減収につながるため、出穂期に薬剤防除する。

さらに、出穂期防除の7日から14日後頃（発生が多い場合は7日から10日後）に追加で薬剤防除する。

イ 出穂とは穂の先端の籾が少しでも顔を出した状態であり、全体の4～5割の茎が出穂した日を出穂期という。ほ場における出穂期の確認は難しいため、生育予測ツール（Agrilook）の活用や、走り穂が見られる頃などを参考に判断する。

ウ 一部の地域ではエチプロール水和剤（商品名：キラップフロアブル）でイネカメムシに対する感受性が低下している事例が生じていることから、防除薬剤の選定については地域の指導機関等に相談する。

2 注意報（7月17日発表分）

- （1）作物名：水稻
- （2）病虫害名：斑点米カメムシ類
（イネカメムシ、カスミカメ類、クモヘリカメムシ等）
- （3）注意報発表の根拠

ア 7月上旬の巡回調査における本田のすくい取り調査（47地点94ほ場）において、斑点米カメムシ類の平均捕獲数が2.57頭（平年0.88頭、前年0.85頭）と、過去10年間で最も多かった。

イ イネカメムシについて、一部地域では出穂した「あきたこまち」のほ場で多数の発生を確認しており、また県内各地の出穂前の水田においても発生を確認してい

る。

ウ 7月上旬の巡回調査における畦畔雑草のすくい取り調査（42 地点 84 ほ場）において、斑点米カメムシ類の平均捕獲数が 22.96 頭（平年 14.86 頭、前年 12.67 頭）と、過去 10 年間で 2 番目に多かった。

（4）防除上注意すべき事項

ア イネカメムシ対策として出穂期に薬剤防除する。また、イネカメムシ及び他の斑点米カメムシ類の対策として出穂期防除の 7 日から 14 日後頃（イネカメムシの発生が多い場合は 7 日から 10 日後）に追加で薬剤防除する。さらに、その後も斑点米カメムシ類の発生が多い場合は、必要に応じて追加防除を実施する。

イ 1（4）ウに同じ。

ウ 出穂 2～3 週間前までに、斑点米カメムシ類の発生源となる水田畦畔のイネ科雑草の除草を実施する。ただし、出穂直前の除草は本田にカメムシを追い込むおそれがあるため注意する。

エ 水田内で穂をつけたヒエ類及びイヌホタルイは、斑点米カメムシ類の発生を助長するので除去する。

3 注意報（8月2日発表分）

（1）作物名：水稻（早生及び中生品種）

（2）病虫害名：イネカメムシ

（3）注意報発表の根拠

ア 7月下旬の巡回調査における本田のすくい取り調査（47 地点 94 ほ場）において、イネカメムシの平均捕獲数が 1.58 頭（平年 0.38 頭、前年 1.36 頭）と、過去 10 年間で最も多かった。

病虫害発生予察注意報等の防除指導により、出穂期防除が広く実施されており発生は抑えられているものの、一部のほ場で発生が確認されている。

イ 巡回調査において、県内複数地点で幼虫の発生を確認しており、8月上旬以降に次世代成虫の発生が増えることが予想される。

また、予察灯による調査では、7月上旬頃から複数地点で越冬世代成虫がこれまでになく多く誘殺されており、次世代虫の発生も多くなると予想される。

このため、「あいちのかおり S B L」等、今後出穂期に入る作型では特に注意が必要である。

（4）防除上注意すべき事項

ア 2（4）アに同じ。

イ 1（4）イに同じ。

ウ 1（4）ウに同じ。